HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	登壇者紹介と発表要旨(登壇順)
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 3-3
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72175
Type	other
File Information	resenter.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

登壇者紹介と発表要旨（登壇順）

パネリスト

平石 典子（ひらいし のりこ）

筑波大学大学院人文社会科学研究科准教授。専攻は比較文学。主な著書として、『煩悶青年と女学生の文学誌 ── 「西洋」を読み替えて』（新曜社、2012 年）、『異文化理解とパフォーマンス』（春風社、2016 年、共著）、『越境する言の葉 ── 世界と出会う日本文学』（彩流社、2011 年、共著）など。

日本近代文学がその初期から繰り返し描いてきたのは、男性が女性に外国語（や外国文学）を教える姿であり、それが恋に発展する情景であった。明治文学に描かれた「外国語を使う女性像」の分析から、当時の社会における外国語の位置づけと、女性がそれを読むことが意味するものを考えてみたい。

高田 里恵子（たかだ りえこ）

桃山学院大学経営学部教授。専攻はドイツ文学。著書として、『女子・結婚・男選び ── あるいは〈選ばれ男子〉』（ちくま新書、2012 年）、『文学部をめぐる病い ── 教養主義・ナチス・旧制高校』（ちくま文庫、2006 年）、『グロテスクな教養』（ちくま新書、2005 年）など。

日本の教養（主義）の特徴は、学校の勉強なぞ軽くこなし、そのうえで「自発」的に文学や哲学や芸術を求めること、つまり学校の勉強という殻をやぶることにある。一方殻をやぶることは女性的教養とは結びついておらず、「女の子」の限界が殻をやぶれないことのなかに見いだされてしまう。こうした「自発性」礼賛はいつごろ誕生したのかを考察していきたい。

小平 麻衣子（おだいら まいこ）

慶應義塾大学文学部教授。専攻は近代日本文学。著書として、『夢みる教養 ── 文系女性のための知的生き方史』（河出書房新社、2016 年）、『21 世紀日本文学ガイドブック 7　田村俊子』（ひつじ書房、2014 年、共著）、『女が女を演じる ── 文学・欲望・消費』（新曜社、2008 年）など。

近代文学研究は何をやるのかよくわからない、と言う人がいる。その理由の半分は、文学の研究方法が、大学のありかたに伴う教養観の変化と大きな関係を持っているところにある。研究と教養と趣味の歴史的関係を、ジェンダーの視点を入れて考える。

コメンテーター

水溜 真由美（みずたまり まゆみ）

北海道大学大学院文学研究科准教授。専攻は近現代日本思想史、ジェンダー論。
著書として、『『サークル村』と森崎和江 ── 交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、2013 年）。

司会・進行

蔵田 伸雄（くらた のぶお）

北海道大学大学院文学研究科教授・同応用倫理研究教育センター長。